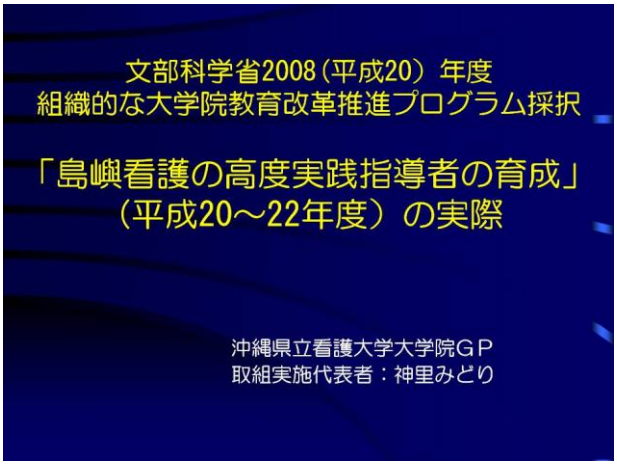
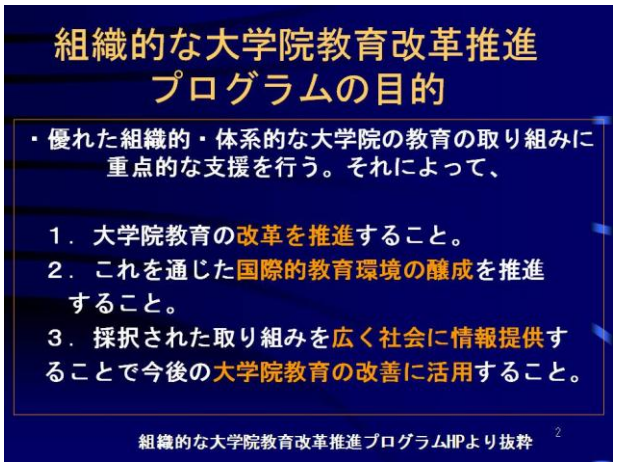
大学院ＧＰ「島嶼看護の高度実践指導者の育成（平成20～22年度）」の実際

沖縄県立看護大学教授・大学院GP取組実施代表者
神里みどり

みなさんこんにちは。本日はご来場本当にありがとうございます。組織的な大学院教育改革のプログラムの推進ということで助成金をいただきましたので、私のほうから簡単ではございますが、実際の3年間のプログラムの内容をご紹介いたしたいと思います。



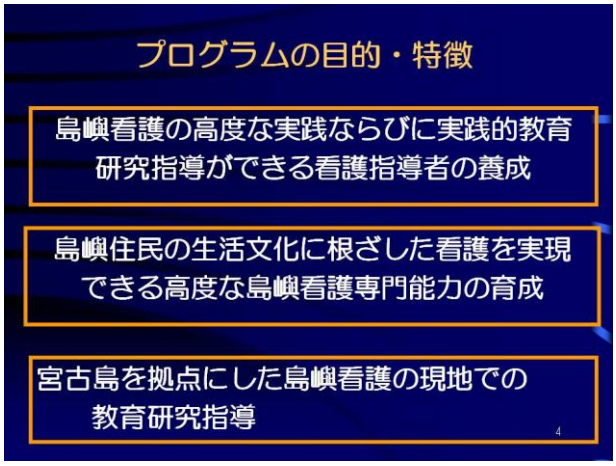
2008年に文部科学省が助成しております組織的な大学院教育改革推進プログラムに本大学が申請を行い、採択されました。この助成金は優れた取り組み（Good Practice ということでGPと呼んでおりますが）に与えられるもので、本大学が申請したプログラムが素晴らしい取り組みの1つとして取り挙げられたということを意味していると思います。組織的な大学院教育改革推進プログラムの目的には3つございます。1番目に大学院教育の改革を推進すること。2番目にこれを通じた国際的教育環境を良くしていこうということ。3番目に、採択された取り組みを広く社会に情報提供する、そして今後の大学院教育の改善に活用していくという目的がございます。



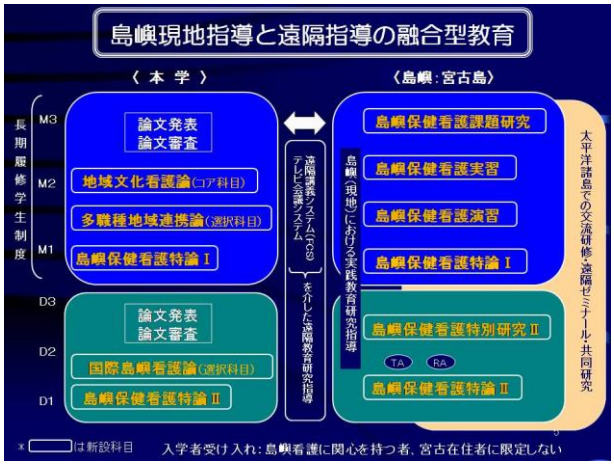
この文部科学省のプログラムの目的を受けまして、本大学院に島嶼看護の取り組みということで、従来ある先端保健看護分野に島嶼保健看護という領域を新しく設けました。

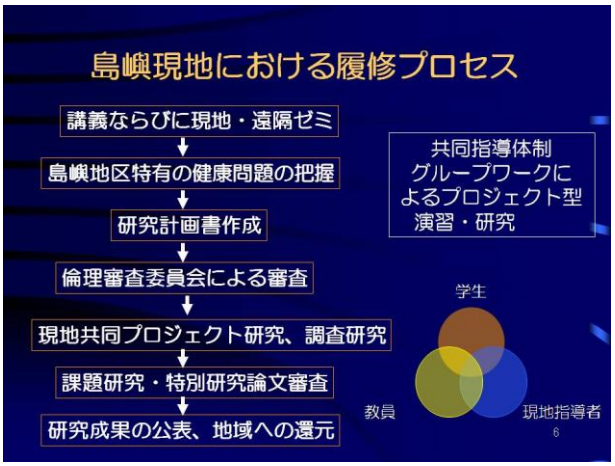
プログラムの目的ですが、島嶼看護の高度な実践ならびに実践的教育研究指導ができる看護指導者の養成、

そして住民の生活文化に根ざした看護を実現できる高度な島嶼看護専門能力の育成、それから特徴的なことといたしましては、宮古島を拠点とした島嶼看護の現地での教育研究指導です。

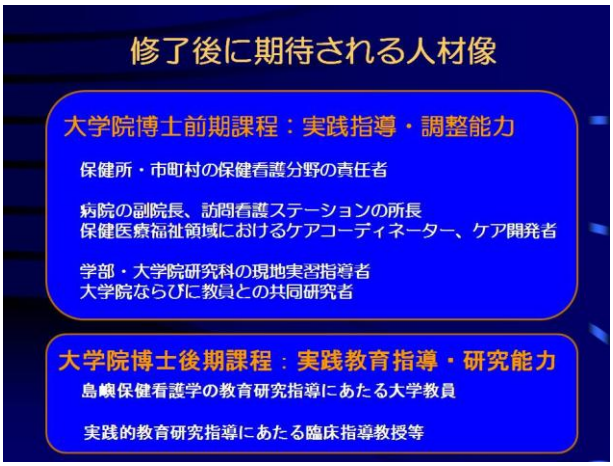


プログラムの概要になります。島嶼現地指導と遠隔指導の融合型教育について、スライド上のブルーの部分をご覧ください。例えば修士の課程は通常2年で終了しますが、3年間の長期履修学生制度が活用できます。そして下の緑の部分が博士後期課程になりますが、各課程に島嶼看護学に関する科目を新しく設置しております。向かって左側が本学から発信する授業や本大学での授業です。右側ですが、宮古島にサテライト教室を設置いたしましたので、宮古島在住の学生(今日も入っていますけれども)が現地で学習できる環境を整えています。遠隔講義システムによる受講、そして現地での指導も行える環境になっております。特に演習・実習・研究に関しましては、宮古島においては実践的な教育研究指導を行います。さらに実習の一部といたしまして、太平洋諸島での交流研修、研修ゼミナール、遠隔ゼミナール、共同研究なども含まれております。こちらの島嶼現地における履修プロセスは、通常の修士・博士課程のプロセスと一緒です。研究計画書を書き、倫理審査会に提出して、それから現地の共同プロジェクトや調査研究の後、論文を作成、論文の審査を受けて学位を取得する、という通常の流れになっております。そして最後に、研究成果の公表と地域への還元になっています。

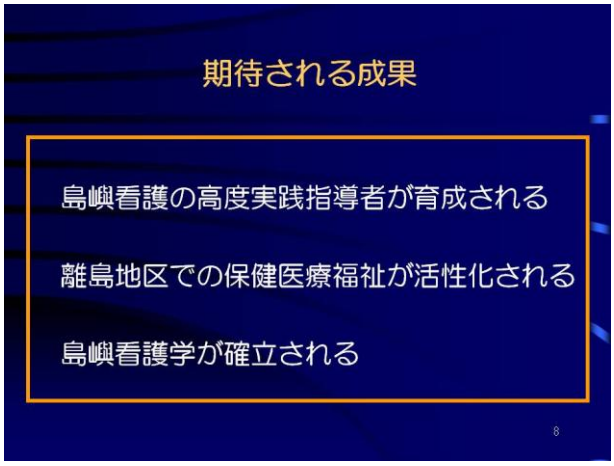




修了後に期待される人材像といたしましては、前期課程では島嶼における実践教育指導を担う保健・医療・看護分野の責任者、及び多職種協働によって培われた調整能力を活かしたケアコーディネーター、さらに大学において現地指導者として、また共同研究者としての活躍を期待しております。後期課程では、島嶼保健看護学の教育



研究指導にあたる大学教員や臨床指導教授などの役割を担えるような人材育成を目指しております。



期待される成果は、このように3つございます。人材育成ということで、島嶼看護に特化した高度実践指導者の育成、それから離島地区での保健福祉の活性化、最後に島嶼看護学を確立したいという希望がございます。

それでは3年間の取り組みの実際についてご紹介いたします。

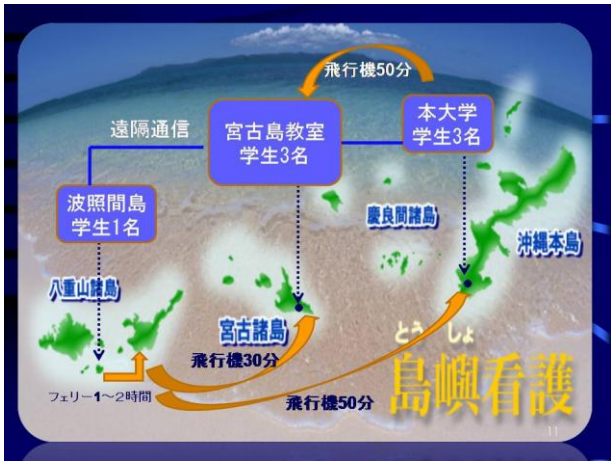
最初の1年は島嶼保健看護のプログラムの準備を行いました。島嶼に関する新しい科目の作成、入学者の募集、そして入学試験の実施が含まれます。加えて太平洋諸島との交流の準備も行いました。それから宮古島にサテライト教室を開設いたしまして、それに伴う遠隔通信環境の整備を行いました。最後に、学内外の教員や医療職者を対象にした島嶼看護に関するFD教育を行いました。

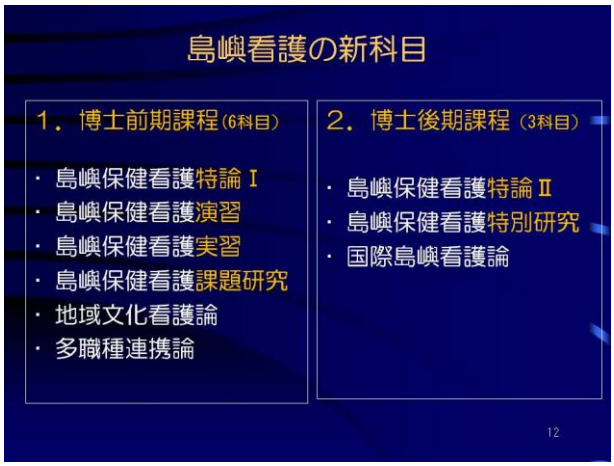
2年目は実際のプログラムの実施になります。博士前期課程2名、後期課程2名、合計4名が入学をいたしました。島嶼保健看護科目として新しく9科目を開始いたしまして、学内だけでなく、学外からも招聘講師による講義を行っております。宮古島での授業と大学からの遠隔授業も開始いたしました。さらに、太平洋諸島との研修・交流を含めた国内外へ情報発信をしてきました。

本年度が最終年度で、プログラム継続の実施と成果公表・評価の年となっております。プログラム開始2年目の入学者が、博士前期課程2名、後期課程1名の総計3名（2年間で合計7名）となっており、プログラムを1年目と同じように継続して行っております。大学院ＧＰの目的の一つに、社会に公表していくという義務がありますので、今回のような国際シンポジウムに加え、学生・教員による学会（国内外）での研究成果の発表もいたしております。

宮古島の、保健師を含めた看護職に対して宮古病院で実際に科目履修をしていただくためや、また大学GPを理解していただくために、宮古島現地の看護職と何度か打ち合わせをしたり、看護師長さんたちを集めて履修説明会およびGP説明会を開催いたしました。このような情報共有を宮古島の看護職らと行うことで、本大学院の受験希望者を募るという活動をしてまいりました。

こちらの図で、学生たちがどこにいるかをご覧になれます。私たち（今日は外国の参加者もいらっしゃいますが）は、こちらのメインランドにいまして、沖縄本島のこちらが大学になります。本日は宮古島からいらした方も参加しておりますが、こちらの宮古島にサテライト教室があります（ポインターを活用して説明）。そして波照間島にも、学生が1名おります。本大学には、博士後期の学生がおりますが、研究調査の際は、本島から宮古島へ飛んで、宮古島で研究活動をしたり、その際に宮古島教室を活用したりしています。それから教員も本学から遠隔講義も行いますが、時々、遠隔講義ではなく実際に宮古島教室に行って講義を行ったりしています。波照間島の学生を含め、遠隔の学生は宮古島教室で授業を受けます。2カ月に一回程度は研究指導などで本学に来校する場合もありますが、ほとんどの授業を通信で行えるようなシステムを構築しております。





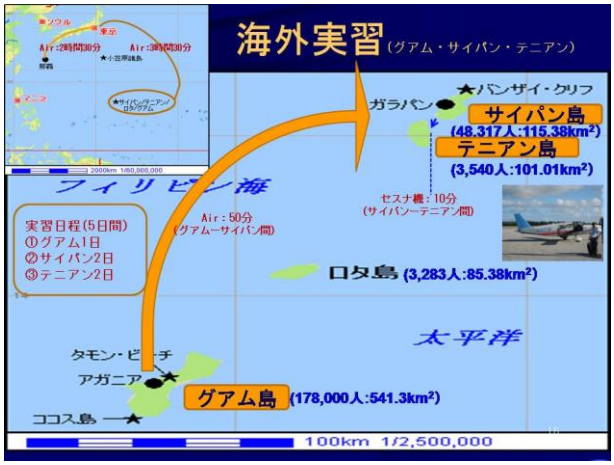
島嶼看護の新科目は、博士前期課程が6科目、後期課程が3科目になっています。前期課程では、特論I、演習、実習、課題研究、地域文化看護論、多職種地域連携論の6科目、後期課程が特論II、国際島嶼看護論、特別研究の3科目になっています。今回は詳しいシラバスの内容まではご紹介いたしませんが、ホームページに日本語版と英語版を全て掲載しておりますので、ご関心のある方は是非ご覧になっていただければと思います。

これは、国際島嶼看護論の中で、5カ国の太平洋地域の先生方を招聘した時の写真です。グアム、豪州、台湾、ハワイ、ニュージーランドの先生方です。これに関しても宮古島へ本学での講義を発信し、それから豪州のサビナ先生には宮古島に飛んでいただいて、そちらでも講義をしていただきました。このように、実際に両方で（本学と宮古教室）授業を実施することができました。

実習は6単位となっており、CNSと同じような単位数にしております。通常、本大学は4単位ですけども、実践を強

化する意味で6単位にしています。県内や国外の島々で実習を行います。
(ポインターで示しながら)こちらが沖縄本島、それから宮古島、八重山諸島です。例えば渡名喜島で(ここは人口が531名のところで、医師一人、看護師一人の診療所がありますが)実習をしたり、また日本最南端の波照間島でも実習を行っています。

海外実習の実際です。こちらは本年度の実習の様子で、左上はグアム大学での講義の様子です。右側の写真は、ロタ島からサイパンに来た患者さんを、本学の学生が現地の理学療法士の指示の基で、実際に看護援助しているところです。左下はテニアン島での高齢者のデイケアの様子です。テニアン島にある施設で、以前はサイパンとかロタ島などからも高齢者がデイケアに参加するためにテニアンに船で来たりしていました。現在は昨年度から船が一切なくなりセスナ機のみでの移動になっています。高齢者と申しましても、55歳からが高齢者ということで学生も教員も非常に驚いたしだいです。テニアンでは平均寿命が非常に短いということで、55歳からが高齢者だということです。



右側の写真はサイパン島にあるゲストハウスで、ロタ島、テニアン島から来た患者さんが宿泊しています。患者さんと一人の介護者しか入居できないようになっています。テニアン島とロタ島によって建物(宿泊所)が分かれておりそこに在住している事務職員も島出身者です。飛行場から宿泊所、そして宿泊所から病院までの送迎もすべて島の事務の方たちが行ってくれるので、非常によいシステムだと思いました。

大学院の博士課程には実習の科目はないですが、海外の大学院教育の実際を視察する目的で、国際島嶼看護論の科目の一環として、学生がオーストラリアで研修を行いました。リモートナースの上級看護師を目指すための修士課程のコースの科目の一つとして、フィジカルアセス

メントの講義・演習と、事例を活用したクリティカルシンキングをトレーニングするためのロールプレーの授業に参加をしました。

（スライド左下）これは700人くらいの診療所の先住民のヘルスワーカーと看護師さんで、ドクター一人と共に700人の住民の健康を管理しているということです。

（写真右下）これはオーストラリアでの糖尿病の学会（先住民の糖尿病の罹患率は白人に比べて非常に高い）でお会いしたトーレスアイランドの研究者です。トーレスアイランドは、オーストラリアの一番上の方に位置する島々です。本大学の島嶼の学生に親しみを感じたらしく（顔は似ている）、いろいろ島に関する話題を持ちかけてくれました。

これは、本日のシンポジストでいらっしゃるTsuda先生が創立した米国の太平洋島嶼看護リーダー会議の様子です。ミクロネシアやヤップ島など、10の太平洋島嶼地域から看護職のリーダーが参加する会議で、30年以上続いています。会議だけでなく、継続教育なども行われ、唯一の免許更新のための単位数を得ることができます。会議は1週間にもわたります。この会議の詳細については、本日Tsuda先生からお話を伺えると思います。

左下の写真は、リーダー会議が終わった後にヤップ島の看護師さんたちと本大学の学生が交流をしている様子です。（これは本学の学生ですが）沖縄の方も先住民に似ていますね、というようなことをヤップ島の看護師さんたちが話をされていました。

最後に（右下の写真）、会議の最終日の晩に、カルチュラルナイトの親睦会が開催され、参加された各島々の看護師さんたちが自国の伝統的な踊りを披露しておりました。この会議に参加する前に会議長からぜひ何か沖縄からも出し物をということで私たちも沖縄のエイサーを踊りました。自国の島々の文化を大事にしていることに非常に感銘をいたしました。

これは国内外の学会への参加で、日本ルーラルナーシング学会と、本学の学生が研究発表を行ったカナダでの学会の様子です。

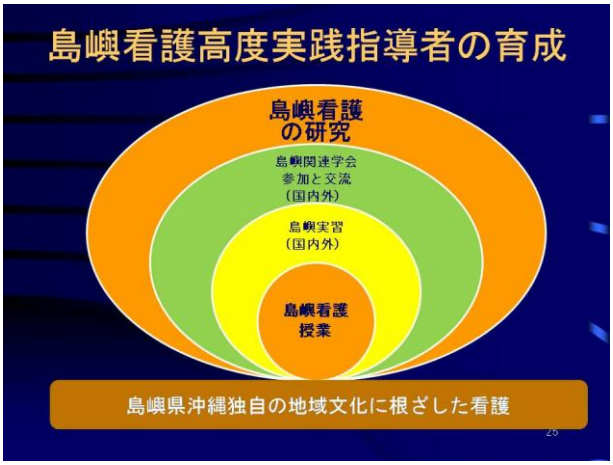
学会に直接参加できなくても、例えば学会が奈良であった場合に、宮古島在住の学生が、遠隔通信を通して奈良の学会に参加することも可能です。実際に本学の宮古島在住の学生が奈良の学会(交流集会)に参加し、島嶼関連の実践者・教育者・研究者とリアルタイムでディスカッションをする機会を設けることができ、双方向のコミュニケーションが可能でした。近い将来、このようなシステムを活用した学会と大学院教育の融合型の学術交流がどんどん進んでいってほしいと願っております。

これは島嶼という島のキーワードによる交流の輪です。真ん中にナーシングリーダーシップの会議の様子があります。本学が今回の助成金をいただいた時に、ナーシングリーダーシップ会議の取り組みは非常にすばらしい取り組みのひとつであると大変よい評価を頂くことができました。ナーシングリーダーシップ会議を開催し、本島、八重山、それから宮古島の看護・保健師のリーダーを募って、島嶼看護に関する課題についてディスカッションをする場を設けました。そして上の写真ですが、遠隔看護に興味があるということで本学(宮古島教室を含めて)に視察にいらっしゃった北海道の大学の教員の方々と、遠隔教育について様々な課題や将来の展望について話をする機会を持つことができました。島嶼看護のキーワードをもとに、様々な形で交流の輪が広がりつつあります。

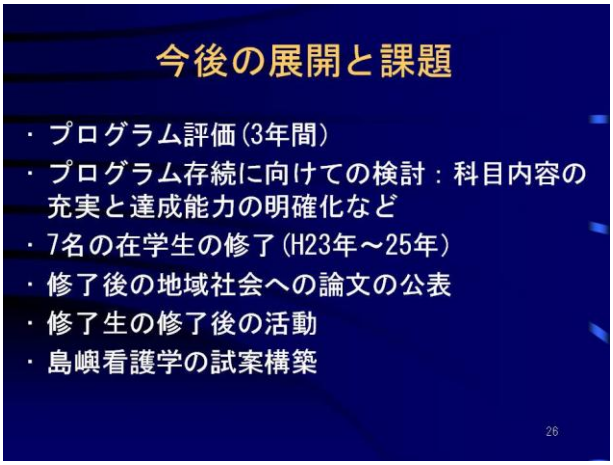
情報発信の手段の一つといたしまして、ホームページを開設しております。英語と日本語版のサイトをできるだけ更新するようにしておりますので、皆様にもぜひ閲覧していただければと思います。公開講演会は、これまでに11回開催しております。大学院GP主催で県内外から島嶼に関する専門家を講師として招聘し、島嶼看護や周辺領域の学術的知識を深める意味でこのような講演会を開催しております。

真ん中のパネルは、文部科学省が主催するGPフォーラムの発表で活用したポスターです。フォーラムでの発表は2回で、特に2回目の発表では、看護系の先生方の関心度が非常に高く様々な大学と交流の機会を持つことができました。それから一番右は、成果報告書で、毎年度(1、2年目を含めて)報告書を作成して、全国の看護系大学やその他の大学に配布をしております。こちらの報告書も全てネットからダウンロードできるようになっておりますので、関心のある方は是非ご覧いただければと思います。

このように、学内、県内、国内、海外に向けて、この非常に小さな(地図からすると点のような)沖縄から世界へ向けて情報を発信し、様々な人たちと交流を重ねながら、島嶼看護の学術的交流を進めていっております。



島嶼県沖縄独自の地域文化に根ざした看護の授業、実習、そして学会参加、交流、研究活動を含めて1つずつ、一歩ずつ(島嶼看護に関する、新しい領域ですので)研究を重ねながら、島嶼看護という学問を構築できればと考えています。



今後の展開と課題についてです。先ずは3年間のプログラムの評価が必要です。その次に、プログラム終了後にどのようにこのプログラムを継続展開していくかが課題です。それから7名の在学生が修了するまでに、少なくとも3年以上かかります。ですから、その学生たちが修了できるように、この大学院GPプログラムを終了後も継続してサポートしていくことが必要不可欠です。そして、修了生の論文の公表を行うことで、島嶼看護への学問の構築に貢献できると考えております。また修了後の修了生の活動がプログラムの人材育成としての一つの評価になります。最後に島嶼看護学の試案構築で、継続したプログラムを存続しながら、少しずつ学問として成り立つように研究を積み重ねていくことが必要です。皆様のご協力のもとに一歩一歩前進していきたいと思いますので、どうぞよろしくご支援・ご指導のほどお願い申し上げます。